

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

55 光の音

ぼぼ……ぼぼ——ぼぼ……

あらん限りに両手を広げて繰り出した炎は、ニーダマには届かずザネリの目の前で黒い煙となって消えます。ザネリは足を一步前に踏み出し、ぐいと地面にふんばって腹の底から恐ろしいうめき声を発しながら、再び炎を発します。

ぼ……ぼぼ——

指の先からほとぼしり出たのは、指の先ほどの大きさにも満たない火の粉にすぎませんでした。ニーダマの口が、左右ににやりと広がります。

「そうか、そうなのだな。はっはっはっは、我ら、戦に勝てり！」

矢を握るニーダマの二の腕が、興奮でぴくぴくと動いています。ピーテルが、不思議そうに顔を向けます。

「ニーダマ王、様……？」

「魔女王は掟を破った。その報いがいま、襲いかかるのよ！」

そう言うと、ニーダマは弓をぐいぐいと引き絞りながら、兵士たちにも促します。

「射よーっ！」

その言葉とともに、ニーダマの手元から鋭く光る矢が放たれました。

びゅびゅびゅつ。

びゅびゅびゅびゅつ！

同時に、二十もの矢が、ザネリに向けて空を切り裂きます。ザネリは目にもとまらぬ速さで両手をぶつちがいに構えると、さつと広げました。その腕全体から白い光がほとぼしり、ザネリの姿を隠すほどの光の壁を作ります。

白い光があまりにもまぶしくて、ニーダマも兵士たちもぎゅうつと目をつむりました。ニーダマたちの矢がザネリに届いたのか、それとも焼け落

ちてしまったのか、それはきつと、ザネリ自身にしかわからないでしょう。

じじじ、じじじじ……

白い光から、うなるような音が聴こえます。ニーダマがそつと薄目を開けると、あふれる白い光が空に向かって伸びました。それはまるで、逆さまになった白い竜巻のようでした。

「いかん、魔女が逃げるぞ……」

ニーダマが言いましたが、誰の耳にも届きません。光の柱から発せられたぶーんといううなりが、ほかのあらゆる音をかき消してしまっていたのです。

「ゼウオーラ——」

うなりに混ざり、かすかな女の声がニーダマの耳に届きました。

「ゼウオーラ……!?!」

ニーダマはつぶやき、そして思い出していました。

と、うなりを上回る大きな音が、ニーダマの、そして兵士たちの耳に入りました。聞きおぼえのある音に、ニーダマの緊張が高まります。

ずず、ず——

ずずず、ずず——

地面が、小刻みに揺れていました。何かとてつもなく大きなものが、山からやって来ているのです。ただ、あまりの眩しさに、誰もその姿を認めることはできませんでした。

ニーダマが、あらん限りの声を上げました。

「矢を放て、大蛇が来るぞ！ 魔女を逃がすなっ！」

〈 つづく 〉